



Title	附錄 懐德堂水哉館遺書遺物目録
Author(s)	吉田, 錦雄
Citation	懐德. 1939, 17, p. 1-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂水哉館遺書遺物目錄

告文を讀む中井木菟廬呂先生

(書堂遺書遺物寄進の日——昭和十四年三月十四日撮影)



寄進遺書告先賢文

惟昭和十四年三月十四日懷德堂及水哉館後人不肖天生奉展

先賢遺書敬告舊新

懷德堂及水哉館諸先生之靈曰

維昔書堂撤去講帷

先賢遺書紛紛流離手澤存者十留三四賴天寵靈散者復至珮囊雖匱空篋稍備於今存者編過二百卷冊不等合得五百庶承文運藏收芸閣往歲在東託諸帝寮帝室博物館已歸浪速大阪府立圖書館乖違積年未得定區重建鄉庠夙設書厨白壁巍巍臨彼西溝且有祠室

先靈所駐于藏于存且暮鑒照春日熙熙輒躋學廟鞠躬稽額爰奉經韜於萬斯年永傳不朽尚饗

不肖天生 稽首謹告

例　　言

一、本目録は別項本誌上に所載の如く、本年三月、中井家(孫黃裳先生會)より寄進せられたる懷德堂及び水哉館(履軒先生の齋名)の遺書遺物と、其の以前に同じく寄贈を受けたる五十點とを加へ、凡て三百十五點に就き、之を整理し、また最近伊藤家(伊藤雪香先生の遺族ヤツ子殿)より寄贈せられたる有不爲齋本五十餘種中、もと水哉館所藏のものが四點あつたので、便宜上之を其の内に加へ、合せて三百十九點とし、聊か其の内容に就て小解を試みたものである。

一、懷德堂先賢の遺書遺物は、本目録のものが固より其の全部ではない、手稿本の如き、其の散佚したものが尙多數にある、是等は追々搜訪して、本堂文庫に收藏しなければならぬ、また先賢の著述中、板本となりて世に行はれたものは、誠に少數で、僅々二十餘種に過ぎない、大部分は未刻書で、寫本として僅に傳はるのみである。されば是等は將來「懷德堂叢書」として、逐次之を刊行すべきものだと考へる、偏に大方の御援助を乞ふ次第である。

一、さて今回は主として中井家寄進のものに就て、目録を作つたのであるが、大正五年本堂重建以來、本堂文庫中に藏むる所の先賢遺書も少しくあるので、大分重複はするが、是等は更に伊藤家の寄贈本と共に、別に「懷德堂所藏懷德堂先賢書目」なるものを作り、以て次號(第十八號)

の附録として、これを收めたいと思つて居る、讀者乞ふ諸を諒せよ。

終に斯の如き寶重すべき多數の遺書を寄贈せられたる中井、伊藤兩家、並に中井家の寄進に就き、種々斡旋の勞を執られたる本堂顧問狩野直喜先生、及び伊藤家の寄贈に就き、多大の厚意を寄せられたる松雲堂鹿田靜七君に對し、茲に敬んで深甚なる感謝の意を表す。

吉田銳雄謹識

昭和十四年九月

懷德堂水哉館遺書遺物目錄

▲懷德堂記録十六點

一 學問所建立記錄 中井竹山先生手錄

寶曆八年八月、學問所建立の次第を詳記したものである。(其の内容は懷德堂第十二號附錄「懷德堂舊記」に出づ)。

二 懷德堂定約附記 三宅春樓先生手錄

是は附記で、別に「懷德堂定約」と題する一冊がある筈であるが散佚して傳はらない。(同前)

三 懷德堂内事記 竹山先生手錄

一 冊

享保九年五月より天明三年三月に至る約六十年間、學事に關する事項凡て六十六條を記してある。(同前)

四 懷德堂外事記 竹山先生手錄

一 冊

享保十一年より安永九年に至る約五十五年間、學問所の奉行所に對する事項七十三條を記してある。(同前)

五 學問所來歴 竹山先生自筆

卷子本 一 卷

竹山先生が寶曆八年（時年二十九）學問所預人となつた時、學問所の來歴を記したもので、卷末に翌九年十二月の附記がある。（懷德第十三號附錄「懷德堂舊記」參看）

六 學校公務記錄 竹山先生手錄

一 冊

安永九年十一月より寛政九年十月に至る約十八年間、學校の公務に關する記錄で、凡て百六十四條を收む。（同前）

七 懷德堂義金簿

一 冊

筆者不明、處々竹山先生の書入がある、天明元年十二月懷德堂同志の趣意書、並に同志の義捐金額及び氏名を記してある。（同前）

八 懐德書院掲示 竹山先生手筆

一 冊

寶曆十四年甲申初夏竹山先生作る所で、二限（食限三次、門限二更）及び五勿（勿爭鬭、勿ニ
酗酒、勿ニ賭博、勿ニ登ニ劇場、勿ニ踏ニ倡街）を掲げて學徒に示したものである。

九 御同志中相談覺書 竹山先生手錄

一 冊

天明二年竹山先生學主兼預人となりたる時、同志と協議したる事項十六條を記したものである。（懷德堂第十三號「懷德堂舊記」參看）

一〇 三宅幸藏變宅に付御同志中懸合覺 竹山先生手錄

一 冊

春樓先生の二子幸藏・永藏が、竹山先生及び同志との相談を裏切りて、恣に轉宅せる經緯を記したものである。(同前)

二 逸史獻上記錄

中井蕉園先生自筆 カ

一 冊

寛政十年十一月、幕府より竹山先生の著逸史獻納を命ぜられた時の顛末を記したものである。(同前)

三 竹山先生遺狀 竹山先生自筆

六 通

寛政十二年正月、竹山先生(時に年七十一)大病に罹りたる時、豫め遺狀を作り置いたもので、弟履軒、二子蕉園、碩果及び同志に宛てたものである。但し内二通は、大阪學校書類第四卷に收む。(同前)

卷子本 六 卷

三 懷德堂文書

學問所建立文書二卷、學校再建文書一卷、大阪學校書類一卷、學校公務書類一卷、衛尹御入請書一卷の六卷で、其の内容は懷德第十四號附錄「懷德堂舊記拾遺」に載せてある。

四 義金助成金簿

一 冊

萬延二年中、平瀬市郎兵衛の預つて居た助成金の控書である。(其の内容は懷德第十四號「懷

〔徳堂舊記拾遺〕に收む)

五 助成金證書 附、逸史板賃榻一札、並山片平右衛門書柬三通

四 通

懷德第十四號懷德堂舊記拾遺參看。

六 歎願書案 並河寒泉先生手錄

一 緡

學校經營困難に付退轉せざるやう保護せられたき旨、教授並河寒泉、預人中井桐園兩人の名を以て、慶應三年正月附奉行所に差出したる歎願書案である。尙これに學校由緒書、及び添書口上覺四通を附してある。紙數凡て九葉。

▲懷德堂遺書 九十二點

七 萬年先生論孟首章講義

一 冊

享保十一年丙午十月五日懷德堂が官許を得て大阪學問所と稱した其の開講式に、學主三宅石菴先生が、論語の學而篇第一章と、孟子の梁惠王上篇第一章とを講じた、其の際の講義筆記である、筆者は未詳、片假名交り文で十三葉ある、終に當日の聽講者五井藤九郎(蘭洲)、富永吉左衛門(芳春)を初め七十八人の名を列記してある、因に現懷德堂の記念祭恒典を十月五日と定めたのは、これに基いたものである。

八 萬年先生遺稿 竹山先生手寫

一 冊

萬年先生の遺稿は享保九年三月の大坂大火に焚け、其の後作る所のものは、其の子春樓先生が旁羅搜索して祕藏されて居たが、安永元年十二月二十二日賊に盜去られた、是の書は竹山先生の許に在つた遺稿で、中庸定本と遺詩十九首（別項「緩歩帖」參看）及び算法示蒙を載せてある、每半葉九行、行二十字、竹山先生の序を併せ紙數僅に九葉。

五 懷德堂考定中庸定本

石菴先生考定、春樓先生書

卷子本 一 卷

明和六年正月三宅春樓先生の手筆に係る、堅一尺の巻子本で、行十六字、細楷を以て中庸白文を記し、終に「右中庸一篇第十六章、在二十四章後者、吾先人所發明也云々」の識語あり、以て中庸の錯簡説を述べてある。

三〇 中庸錯簡説

竹山先生撰並書

卷子本 一 卷

安永元年冬作る所で、前記石菴先生の錯簡説を踏襲し、昔宋の朱熹と張南軒とが中庸の疑義に就て往復論議した點も、蓋し此處に在ると其の證を擧げて説明したものである。

三 中庸定本

一 帖

寛政十二年庚申冬十二月、中井蕉園先生が同志と相謀り、父竹山の自筆に係る懷德堂考定中庸及び中庸錯簡説とを木板に附して摺本としたもので、前川虛舟の刻する所に係る。

三 非物篇

五井蘭洲先生撰、竹山先生手寫

二十卷、附錄共 六 冊

是書は徂徠の論語徵を攻撃したもので、又其の附錄は辨道を非難したものである。蘭洲先生

歿後、竹山が遺命を奉じて、其の遺稿を整理し、これを手寫した所の原本で、明和三年の序がある。毎半葉十行、行毎に二十字。

三 勢 語 通 蘭洲先生手稿

卷首に叙言七條を掲げてあるが、其の内に、「實事のみを抜出して、古人の注を用ひ、また自らの見を加へ、内の卷と名づけ、我家の伊勢ものがたりとし、ひとつ子の娘によましむ、残れるは實事にあらねど、言づかひの古く面白く、注者のとき得ざる所も有りと見ゆる故、外の卷と名づけて、其注を施し侍る」とあり、内卷二冊、外卷二冊として、本文を掲げ注を施してある。

四 日本書紀 蘭洲先生刪正 三十卷、合本 五 冊（内第一冊闕）

寛文九年刊行本を用ひ、黃筆を以て書記の字句を刪正し、また欄外に自説を書入れしてある。

三 紀 第 一 蘭洲先生手稿 一 冊

書紀の文を刪正して、簡約に編纂しようと試みたものか、神武天皇より應神天皇に至るまでの一冊より存して居ない、紙數僅に十葉。

二 不 問 語 中井斉菴先生撰 一 冊

享保十三年斉菴先生三十六歳の時作る所の國文の隨筆である。卷首に自叙あり、本文每葉二

十行、行二十四五字、凡て三十四葉、卷末に寛政三年辛亥作る所の竹山先生の跋及び貽範先生略傳が載つて居る、寛政三年大阪敦賀屋書林の梓行に係る。

二七 哀祭私説 附、幽人先生服忌圖

一 冊

中井斂菴先生撰、竹山先生補正、履軒先生校訂

是の書は斂菴先生が享保六年二月作る所の自叙によると、父の喪に遭ふた爲に、朱子の家禮及び丘氏の儀節により、併せて我が邦諸儒の書を放へて、參互斟酌し、問々家庭の舊儀と師友に聞く所とを以て輯して一巻となし、以て吾が家に古禮の行ふべきものあるを知らしめる所である、卷首に寶曆十年二月所作竹山の序、次に自叙あり、本文は毎半葉十行、行毎に二十字、二十四葉ある、終に享保辛丑所作弟文之の跋及び寶曆庚辰九月所作履軒の跋がある。尙之に附するに履軒先生作る所の「服忌圖」六葉がある、抄者は誰人か明かでないが、題簽は碩果先生の筆に係る。

二八 易 斷 竹山先生手稿

五 冊

每半葉十行、行毎に十八九字、凡て百四十八葉、卷末に明和（和字年に作る、恐くは誤寫）三年丙戌季冬廿七日卒業とあれば、もと書物の欄外に首書したもの改めて書下し、別冊としたものである、但し草本で定本ではない。

二九 詩 斷 竹山先生手稿

八 冊 四 冊

唐本「詩經・奎璧集證」六順堂梓行、每半葉九行、行十七字の高頭本を用ひ、欄外に古注及

び宋元明諸儒の採るべき説を擧げ、また「竹山曰」として自説を掲ぐ、而して本文の韻字には朱圈を字隅に附し四聲を示してある、是の書詩斷と名くるも、履軒先生の七經逢原の如く別に書下して冊子としたものはない。

三〇 禮 斷

竹山先生手稿

十卷五冊

書林寶善堂梓行に係る重刊監本元陳澔禮記集説（毎半葉十行行十八字本）を用ひ、欄外に諸儒の説並に自説を掲げてある。

三一 四書断

竹山先生手稿

四冊（内論語一冊闕）

詩經と同じく六順堂梓行の高頭本を用ひてある、是の書もと五井蘭洲先生の藏本であつたのを、竹山先生之を譲受けたものか、欄外に蘭洲先生自筆の書入あり、竹山先生は其の空白の處に諸儒の説及び自説を朱墨兩様にて掲げ、「善按」若くは「竹山曰」としてある。

三二 尚書管見

竹山先生手稿

一冊

孔傳蔡註に據り、舜典、大禹謨、益稷、禹貢、甘誓、伊訓外十二篇中疑義あるものに就き其の句を摘記して自説を述べたもので、凡て二十八條、是の書弟履軒先生に示したもののが、同先生手筆の附箋が六箇所貼せられて居る、每半葉九行、行十七字、凡て十三頁。

三三 非 徵

竹山先生手稿

二十卷八冊（内第一冊闕）

蘭洲先生の非物篇に次で、更に徂徠の論語徵を論難した書である。第一、二卷の第一冊が闕

本になつて居る、毎半葉十行、行毎に二十字、是の書は、前記の非物篇を正編とし、これを續編として、共に天明四年に出板せられた。

三四 逸史草本 竹山先生手稿

首卷共十三卷 十二冊

是の書は徳川家康一代の偉績を叙したもので、三十餘年間五たび稿を易へたといふ竹山先生著述中最も骨を折つたものである、是は其の草本で第何稿かは分らぬ、首卷に明和七年四月作る所の題辭、次に世系表、参考書目、釋言、目錄を掲げ、以下十二卷は永祿三年より元和二年に至る五十七年間の事蹟を編年體に記し、卷首或は卷末には「逸史氏曰」として論贊が掲げられて居る。（別項「逸史」參看）

三五 逸史 竹山先生手筆定稿

首卷共 十三冊一帙（函入）

是は逸史の定稿本で、嘉永元年並河寒泉先生が印行したもの、底本であり、また寛政十二年七月幕府の命により逸史一函を獻納した其の時の原本である、首卷には寛政十一年五月作る所の自序、次に進牋、脇愚山の序、次に題辭、系表書目、釋言、目錄を收め、以下前記の如くにして、たゞ題箋が十二支に分つてある、而して卷末に「右逸史全部十有三卷、除首卷爲本編十有二卷、本編通計十八萬千九百六十六言」と記されて居る、首卷を除き毎卷毎半葉十行、行二十字。（懷德第十三號逸史獻上記錄參照）

三六 逸史自序進牋 竹山先生手稿

一冊

逸史自序と進逸史牋の自筆草稿である、別に抄者不明の同草稿を前に附してある、附箋が數

箇所貼せられて居るが、何れも奉行所役人が意見を書いたものらしい。

三七 逸史進牋草稿 竹山先生手稿

「進逸史牋」の草稿、及び奉行所に差出したる同文稿と進牋の和解とを收む。（懷德第十三號逸史獻上記録參看）

三八 逸史自序進牋質疑 竹山先生手稿

自序及び進牋を誰かに見せ批を乞ひたるに對し、更に應答したるもの、及び字句の用法に就き、誰かの意見を記せる附箋を貼してある。

三九 左傳比事蹄 竹山先生手稿

一 冊

是の書は蘭洲先生の命を承けて、明の吳化龍撰する所の左傳比事を取りて、これに訓釋を施し其の紕繆を正したもので、本文は板下原本になつて居る、卷首に寶曆六年四月作る所の自筆の序あり、次に凡例十一則を掲げ、編纂の體例を述べてある、而して奥書に「明和六年二月開板人北久太郎町四丁目本屋丹六」と記されて居るが、併し本文が處々訂正改刪せられて居るから、遂に是の書は出版にならずに終つたらしい。

四〇 竹山先生首書近思錄

十四卷 五 冊

延寶元年京都吉野屋の刊行に係る葉采集解本を用ひ、他説を欄外に書入れたもので、自説は甚だ少ない。

四一 靖獻遺言 竹山先生遺藏

二 冊

欄外に少しく竹山先生の書入がある。

四二 雜肋篇疑文 竹山先生手稿

一 冊

五井蘭洲先生の文集「雜肋篇」中、用語の疑はしきものを摘出して質したるもの、履軒先生の筆と見ゆるもの二三あれば、或は履軒先生に示したるものにあらざるか、紙數十葉。

四三 奠陰集 竹山先生手稿

二十冊

竹山先生の詩文集稿本である、文集十二巻十二冊、詩集八巻八冊。毎半葉十行、行二十字乃至二十四字。體を分たずして作つた年代順に書れてある。

四四 奠陰略稿 竹山先生手稿

一 冊

竹山先生の詩文集は、前記の奠陰集に總て收められてあるが、是は其の前に出來たもので、所謂略である、詩のみを載せてあるが、各體皆ある、卷首に安永二年癸巳の秋作る所の自序あり、每半葉十行、行毎に二十字、五十七葉ある。

四五 竹山居士東征稿 西上記附 竹山先生手稿

一 冊

是の書は竹山先生が安永元年壬辰四月、京師の護衛堀田出羽守に従ふて江戸に赴いた時の詩稿で、三箇月滞在の後八月に至り歸路に就いた、これが「西上記」の一篇で紀行文である、卷首に安永二年四月南宮大湫作る所の序あり（原與隣書）、卷末に安永二年癸巳夏作る所の

溢井大室の跋あり（辻本彌中の書）、而して是の書成るや溢井大室、細井平洲及び南宮岳の三人に各一本を送り批を請ふたが、此には平洲の批のみを紀世馨の批評として竹山の筆にて朱批を施してある、東征稿は毎半葉十行、行毎に二十字凡て十七頁、西上記は毎半葉九行、行毎に十九字、凡て二十一頁。

四六 芳山紀行 幷詩 竹山先生手稿

一 冊

竹山先生三十四歳の時、即ち寶曆十三年癸未の歲三月四日より六日間、一行六人（竹山、金崎可臯兄弟、入玉露、中村兩峯、古林槐菴）と俱に芳山に遊んだ時の紀行文並に芳遊雜詩十三篇を收めてある、記遊の首に邦俗「さくら」を稱して櫻とするは沿習の訛なり、實は海棠なりとの考證あり。每半葉十行、行二十二字凡て二十七頁。

四七 西岡集 竹山先生手稿

一 冊

是の書は明和元年甲申八月竹山先生の室人の郷里なる西岡の革島家に事があつたので、一年餘書堂の教授を履軒先生に託し、妻孥を携へて西岡に假寓した、其の間に於ける詩文を輯して一巻としたもので、大部分は詩で、文は僅に七篇のみ、卷首に甲申八月作る所の自序あり、每半葉十行、行二十字、凡て二十七頁。

四八 東 稽 竹山先生手稿

四 卷 四 冊

明の朱舜水が談綺を按じて、東式を詳細に記したるもので、明和五年戊子四月作る所に係る。

兜 閑距餘筆 竹山先生手稿

一 冊

毎半葉十行、行二十字、凡て二十五頁。享和元年春作る所の自序あり、是の書は非徵を作る時、參攷の餘力、目を徂徠集に寓したるに、諱言妄説篇簡に溢れて居るので、迺ち技麿に堪えず、意に觸れ辨駁を加へたものが、日を積み此の一冊子となつたと記されて居る。

吾 草茅危言 竹山先生手稿

五 卷 五 冊

竹山先生に茲の編の腹藁は久しき以前よりあつたが、天明八年戊申白川樂翁侯の大坂巡視あり、竹山を召して時弊に關し政見を問はれたので、遂に徐々草を起し、五卷の書としたもので、竹山の政治經濟の議論は是の書に盡きて居る、寛政元年冬作る所の自序あり、本文は片假名交り文に記されて居る、卷末に寛政八年四月作る所の脇愚山自筆の跋がある。

吾 竹山先生國字牘續編 草本

八 冊

是の書は竹山先生が交友竝に門人に對し、學問政治經濟等種々の問題につき其の間に答へたる尺牘を集めしたもので、竹山先生自筆の草稿もあり、また他人寫す所もあり相半ばして居る、都て八十四篇、内十一篇闕く。

三 竹山先生國字牘續編

一 冊

前者に洩れたもの八篇、及び附錄「社倉の事」一篇を收む、同じく手稿と他人寫す所と相半ばして居る。

三 竹山先生國字牘附卷

一 冊

齊藤高壽與竹山先生書三篇、答齊藤高壽並再覆、逸史問答、菱川宇門與竹山先生第三書を收めてある。筆者は未詳。

四 奉陰消息 竹山先生手稿

一 冊

是は別項「蒙養篇」の草藁で、候文で書いた爲に、最初は斯く名づけたものであらう。

五 龍野貞婦記錄 竹山先生手稿

一 冊

是は播州龍野領内なる佐江村圓照寺の僧教順の妻さんが行狀を假名文にて記した草稿本で、卷尾に「辛卯（明和八年）の五月晦中井積善拜上、知音の御人々」と書かれて居るから、之を清記して人々に回覽せしめたものであらう。

六 災後葬言 竹山先生手稿

一 冊

天明の京師の大火に就き、災後の處置を講ずべき儒生の意見を國文にて記されたもので、都て十六葉、天明八年戊申四月著はす所、時に年五十九。

七 奉陰自言 竹山先生手稿

一 冊

竹山先生の隨筆で、程朱を論じ、神道を評し、面白き説がある、殊に徂徠を攻撃したるもののが最も多く、都て三十三葉、未完の書である。

一 竹山先生草稿

反古紙を綴ぢて草稿用に供したもので、多くの詩文稿が草體で書かれて居る。

二 譲園隨筆 竹山先生手抄

譲園隨筆及び徂徠集に於て非議すべき文句を摘記したるもの。

三 明史鈔 竹山先生手抄

明史中の食貨志、循吏傳、儒林傳、文苑傳及び外國より必要なるものを摘錄したものである。

四 日本史抄書 竹山先生手抄

竹山先生手抄

大日本史中より有要なる部分を抄錄したものの。

五 四書句辨 竹山先生手稿

竹山先生手稿

四子書より文句の同じきものを摘記したものである。

六 詩漁 竹山先生手抄

竹山先生手抄

古人の詩句や詩話を摘記して、備忘に供したものである。

七 雜鈔 竹山先生手抄

竹山先生手抄

二程全書、延平問答、南軒文集、讀書錄、居業錄、千百年眼、韓柳文、群談採餘の諸書を抜萃摘錄せるものである。

壹 走馬看燈 竹山先生手抄

一 冊

朱子文集中より用語の雋麗なるものを摘錄し、作文の用に供したものである。

貳 碎錦 竹山先生手抄

一 冊

諸葛武侯集、國語、孔子家語、老子、列子、鶴林玉露、楚辭、周禮、天工開物、羅山文集等十九種の書籍より錦繡の語句を摘錄したものである。

叁 代萱 竹山先生手抄

一 冊

唐書、無冤錄、淵源錄、藝苑卮言、間情偶奇の諸書より参考に供すべき語句を抜萃したものである。

肆 稲垣淺之丞純孝記錄

竹山先生題箋

一 冊

森對馬守預り所美作國吉野郡田殿村百姓稻垣淺之丞が孝狀を寶曆十三年八月同村庄屋年寄等連署にて乃井野役所に註進したる一件書類であるが、其の終に竹山先生の明和二年正月同志に示したる一文を載せてある。

それによると、淺之丞（字子華）はもと斎菴先生の愛弟子で、後斎菴の推薦で播州安志小笠原家の儒官となつたが、間もなくまた懷德堂に來り、蘭洲先生に從游し、竹山履軒兄弟にも

親交があつた、然るに郷里作州に八十三歳の老父あり、介抱すべき人なきの故を以て仕官を辭して郷に歸り、農夫となりて能く孝養を盡した、其の事が今回公聽に達し、賞賜になつたのであるが、我が堂の建立本意も忠孝を教ゆるに外ならぬ、學校創立以來四十年になるが、一人にても斯様の人材を養成した事は、實に大慶至極である、仍て書付に洩れたことを追加して、同志中に吹聴し、併せて祝品を贈りたき旨を述べてある。是の書は何人かに寫さしめたものであらう、併し朱筆の校字は竹山の筆蹟である。因に竹山先生に別に「子華行狀」一卷あり、明和二年春懷德堂に於て版行された、板下は竹山先生の筆になるものである。

充

雕蟲篇

中井蕉園先生手稿

二一冊

是の書は、蕉園先生二十六歳の時即ち寛政四年二月十五日自ら賦才を試むべく一宵十賦を作り、更に翌五年四月十五日再び一宵十賦を作つたが、此の二十賦を淨書したものである。第一冊は卷首に寛政八年作る所の三村崑山の序があり、次に寛政四年作る所の自序及び贅言六條、次に竹山の錄した命題十賦を記し、次で本文に入り雕蟲篇と題し次行に一格下げて「一宵十賦 壬子二月之望」と記し、以下「露賦」「川賦」等十篇を收めてある、第二冊は卷首に贅言六條、次に竹山の錄した命題十賦を記して本文に入り、雕蟲後篇と題し、次行に一格下げて「後一宵十賦 癸丑四月之望」と記して、以下「怒賦」「樂賦」等十篇を收め、最後に附錄として與脇子善書二篇、答尾藤學士書一篇を載せてある。毎半葉九行、行毎に二十字。

七〇

一宵十賦前編

蕉園先生手稿

一冊

前記のものと同じであるが、是は其の時の草稿で、後更に朱訂を施したものである、竹山、

履軒兩先生の批がある。

七 騰碧囊 蕉園先生手稿

二 冊

是の書は蕉園先生が二十九歳の時、即ち寛政七年春三月同志と共に花を芳山に賞した時作つた處の詩文で、詩を作れば携へた驅囊に入れ文を作れば碧囊に入れたので、斯く名づけた、驅囊は詩二百篇、碧囊は遊記六篇、雜文三篇を收めてある。

三 甲 史 蕉園先生手稿

一 冊

越史と共に「甲越外史」とも題してある、「甲侯世家」を上巻とし、「板垣信形」「山本晴幸」等九人の傳を下巻としてあるが、塗抹改刪した儘の未定稿である。

四 越 史 蕉園先生手稿

一 冊

甲史と同じく未定稿である、「越世家」を上巻とし、「直江兼續」「本莊繁長」等九人の傳を下巻としてある。

五 蕉園先生遺稿 蕉園先生手稿

一 冊

自筆の文稿十七篇を收めてある。處々竹山先生の批がある。

六 杞憂漫言 蕉園先生手稿

一 冊

假名交り文に書いたもので紙數三十二葉、「無名氏」と署し、熟夷（蕭慎）、赤狄（露西亞）

に對する海防策を論じてある。

炎窓代睡 蕉園先生手稿

右は消暑の爲に毎日線香一寸を限りて七律二首づゝを作つた草稿本で、詠物の詩五十首を收めてある、何年の所作か明かでないが、恐らく一宵十賦を作つた寛政四五年の二十六七歳の時であらう。

七 蕉園先生首書周易傳義

二十四卷 五 冊

中井蕉園先生の藏書にして、每半葉七行、行毎に十六字、注双行、行毎に十九字、享保九年京都今村八兵衛の梓行に係る白文の薄葉本である。欄外に蕉園の書入あり、朱子、胡雲峯、楊龜山、丘氏、張氏、蔡氏等の説を載せてあるが、朱子最も多く、間々自説を掲げてある、五井蘭洲先生の説を引いた處一箇所ある。

六 蕉園先生首書詩集傳

十五卷 四 冊

前記周易傳義と同様の薄葉本である。是の書は能く讀まれたと見えて、欄外は固より行間空白にまで細書されて居る、諸家の採るべき説の外、「伯子曰」「叔子曰」として竹山履軒二先生の説が最も多く、間々「坡案」として自説を掲げてある。

五 蕉園先生首書禮記集説

三十卷 十 冊

前書と同じ板式の薄葉本である、是も欄外に書入してあるが、他説は少なく、大部分は「叔

子曰」として履軒先生の禮記雕題略を寫したもので、本文は總て訓點を施してある。

八〇 春秋胡傳 蕉園先生遺藏 十卷三冊

前者と同じ薄葉本で、「蕉園帳中之祕」の印記あるのみ、書入はない。

八一 蕉園先生首書四書

三冊

每半葉八行、行毎に十七字、注双行字數同じ、明和三年京都勝村治右衛門板行の薄葉本である、論語、孟子の三書は共に欄外に蕉園自筆の書入があるが、「叔子曰」として履軒先生の雕題を寫したに過ぎない、大學には書入はない。

八二 蕉園先生首書春秋左傳

三十卷十五冊

杜預集解、明金蟠校訂に係る永懷堂本である、每半葉九行、行毎に二十四字、注双行字數同じ、欄外に「雕曰」として履軒先生の雕題略を寫し、間々「坡云」として自説を掲げ、また林注や顧炎武の説を載せてある。

八三 武經七書 蕉園先生遺藏

七卷八冊

「増補武經集注大全」といふ康熙十年錢登峰の序ある還讀齋本である、たゞ蕉園の印記あるのみ、書入はない。

八四 蕉園先生手寫古文眞寶後集雕題

二冊

京都勝村治右衛門板印の魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集を用ひて、履軒先生の同書雕題を其の儘手寫したものである。

八五

雕蟲自爲

語辭

蕉園先生手錄

小一冊

黄薄葉の小冊子で、蕉園の備忘錄である、前半は語辭並に豫定の詩文題など記し、後半は月課と題し、二十四歳以後十八九年間に自修すべき豫定書目を掲げ、已に讀過したものは書名の上に朱圈を施してあつて、晝は經史子集を読み、夜は稗官、夏は和書草紙物語の類、或は算詩、或は天學など、記されて居る。

八六

蕉園先生手記

小一冊

書きかけの抜萃錄で、西域聞見錄の字句を抜萃したのみ、他は白紙である。

八七

有和年表内篇

履軒先生撰、蕉園先生手寫

一冊

神武天皇辛酉御即位の年より享和二年（蕉園先生歿前一年）まで蕉園先生の手寫に係る、三年以下安政六年までの書入は、碩果及び寒泉兩先生の筆である。

八八

李于鱗唐詩選

蕉園先生遺藏

一冊

寛政五年嵩山房梓行に係る服部南郊考訂の薄葉本である、只一箇所蕉園の書入がある、李于鱗の序末「後之君子、乃茲集以盡唐詩、則唐詩盡于此」の欄外に「後之君子、乃茲集以盡于鱗所好之唐詩、而于鱗所好之唐詩盡于此」と素見してある。

八九

掌中詩韻牋

蕉園先生遺藏

折本一冊

寛政八年再刻の刪補増字本（青洲輯、君林改正）である、「蕉園」の印記がある、西攝、播州へ旅行の時携へたものか裏は一面に其の時作つた詩が細字で書かれて居る、塗抹改刪されて居るので甚だ読み難いが、寒泉先生の編纂に係る壇集中に是等の詩があるか検討すべきものである。

九〇

歷朝捷錄

蕉園先生遺藏

七卷一冊

清、顧九疇の重訂本で、題籤が蕉園先生の筆になるのみ、書入はない。

九一

東萊博議

蕉園先生遺藏

四册（内第一册闕）

伊藤東涯の校に係る寛政十一年印行の有隣館本である、處々蕉園先生の正誤があり、青墨の批點が附してある。

九二

蘇文忠公集選

蕉園先生遺藏

十二册（内第一册闕至第五册闕）

每半葉九行、行毎に十九字の竹紙本である、蕉園先生の印記あるのみ。

九三

石窓草稿

中井碩果先生手稿

一冊

巻首に己巳（文化六年）草稿と題して、其の年作る所の詩十六首を收めたるが、他は雜記にして、或る人の左傳質疑に答へたるもの、及び金錢收入を記したものの大半を占めて居る。

九 碩果先生文稿

二一 冊

碩果先生の手稿本で、毎半葉十行、行毎に二十字乃至二十二字、第一冊に文十九篇、詩一篇、第二冊に文三十七篇と寒泉先生の編輯に係る自筆の箋集殘卷十一葉を附してある。

九 史記雕題集 碩果先生編次並手寫

四 冊

履軒先生の史記雕題は、水哉館遺書中に見ゆる如く、たゞ原本に書入れたのみで、別本として行はれてない、それを碩果先生が別に書下したもので、其の體裁は、本紀や列傳毎に別行とし、本文の一、二句を摘記し、一格をさげて雕題の説を記したものである、卷は分つてない、毎半葉十行、行毎に十九字乃至二十二字。

九 春秋亂賊表 碩果先生手抄

一 冊

是の書は清、顧棟高の編輯に係るもので、碩果先生がたゞ之を手寫したまでである。

九 春秋闕文表 羨文省文附 碩果先生手寫

一 冊

春秋亂賊表と同じく顧棟高の編輯に係る書である。

九 安齋叢書抄 碩果先生手抄

九 冊 (内第一、第二、 第三の三冊闕)

伊勢貞丈の著はせる同書二十四冊中より、種々考證に關するものを抜萃抄寫したものである。

九 周易廣義 穎果先生題簽

六 冊 (内五冊闕)

潘元懋の編輯に成る唐本である、卷の二一冊のみで書入も何もない。

一〇〇 通語 中井履軒先生撰、中井袖園先生手寫 十 冊 三 冊

是の書の内容は水哉館遺書中に記すが、是は板本通語の板下本になつたもので、卷首に天保十三年作る所の清水中州自筆の序及び同じく早野橋邃作、其の子良輔の書になる序がある。本文は每葉十八行、行毎に二十字、凡て百三十一葉、句讀送り假名を附してある、板本は天保十四年二月大阪書林河内屋記一兵衛から出版せられた。

一〇一 陽明文錄 並河寒泉先生題簽 十 冊 (内第一冊闕)

各半葉十行、行二十字の白紙本で、寒泉先生の藏書に係るか、書入も印記もない。

一〇二 古今一一微 履軒先生撰、中井桐園先生手寫 一 冊

水哉館遺書中に出づ。

一〇三 履軒髦言 履軒先生撰、桐園先生手寫 一 冊

水哉館遺書中に出づ。

一〇四 懷德堂藏書目 寒泉桐園二先生手錄 一 冊

懷德堂晩年に於ける藏書目で、記入が未完であるが先づ大部分は記されて居る様である。書

函を八卦函とか八音函とか十干函とか六義函とか四季函とか云ふ名をつけてそれに藏めた、書籍は今現存して居ないから判らぬが、經書及び正史の類は概ね唐本らしく、他は和刻本らしい、大體數へて見ると、經部が百五十部、史部が七十部、子部が四十餘部、集部が一百餘部、和書が八十部、叢書が一部（知不足齋叢書）計四百四十餘部、四千一百餘冊である。

一〇五 懐徳堂本大日本史

二百四十三卷 六十冊

（内原本二冊闕、
今以別本補之）

大日本史が未だ世に行はれざる時、二條城在番の堀田出羽守の知遇を得た竹山先生が、其の紹介にて某侯の藏本を借覽する事が出来たので、寫手を一堂に會して、明和八年十一月中旬から始めて翌年二月下旬に寫し上げたのが是の書である。

其の抄者は三宅春樓、竹山履軒兄弟を初め三十七人で、校正者は春樓、竹山、履軒、加藤竹里の四人である、而して卷末の處々に、「積善謹按」として、附議が附せられて居る、因に原本は二冊闕本になつて居たが、昭和十三年懐徳堂が淡輪本の大日本史寫本から補ふて完本とした。

一〇六 康熙字典

蘭洲先生遺藏

四十冊（一函）

書殻蘭花模様、唐本竹紙、卷中處々に蘭洲、竹山二先生の首書がある。

一〇七 破邪集

明、徐昌治訂

八 冊

是の書は安政二年水戸齊昭公の翻刻に係るもので、同四年三月二十三日同公より懐徳堂に寄

贈されたものである。

一〇八 怡顏齋櫻品 懐德堂遺藏

松岡玄達撰、寶曆八年梓行。

小一冊

▲懷德堂遺物 六十九點

一〇九 懷德堂辛丑壽卷

一卷（箱入）

卷末竹山先生の跋によると、天明元年辛丑六月、竹山先生の母堂が七十初度に會したので、三たび宴を設け客を請待したが、是の巻は詞客を請じた時、席上韻を限りて作る所の詩十有五首を巻端に列し、其他親姻知舊門下生の乞はずして投贈した文若くは詩歌二十有九首、併に家庭爲る所總計四十有八首を綴輯裱装して一大巻（豎一尺徑三寸）としたものである、と記されて居る、今就て之を見ると、竹山履軒兄弟の詩が何時の頃か剥がれたものと見え、箇所空白になつて其の後を存しない。其の他に於ても剥取られたものか、三十四篇よりない、因に此の横巻の裱装は、脇坂侯賜ふ所の能衣裳の一分を用ひたものである。

一〇 懐德堂會餞詩卷

一卷

明和三年十一月、履軒先生が中納言高辻胤長卿に聘せられて京師に游ぶ事になり、中村兩峰がまた白木屋に聘せられて京都に赴く事になつたので、此の兩人を送る爲に三宅春樓、中井

竹山等十二人懷德堂に於て燕集を催し、各韵を分ちて賦した所の詩卷である、卷末に竹山先生の跋がある。

二三 懷德堂文卷

一 卷

井上四明の送中井君子慶歸浪華序、市橋長昭の竹山先生七秩壽序、中村兩峯、細合半齋、片山北海及び脇愚山等十人の呈竹山先生書、早野反堂の祭介菴先生文、都て自筆に係るもの十六篇を收む。

二三 懷德堂詩卷

一 卷

細井平洲、賴杏坪、馬成（竹山門人）、菅茶山、股野克美、原興隣及び脇愚山の自筆に係る詩を收む、何れも竹山先生に寄せたものである。

二三 先哲手簡

不分卷 五 卷

第一卷は、高辻前中納言、遠山近江守、細井平洲、古賀精里が竹山に與へし手簡六通を收む、第二卷は、安達直右衛門、梁田蛻巖、荒木李溪、堀田豊前守等が竹山に與へし手簡五通と紙破に係り筆者未詳のもの一通とを收む、第三卷は、賴春水の竹山に與へしもの四通、同じく頑果に與へし手簡二通を收む、第四卷は、加藤竹里の竹山に與へし手簡三通、同じく蕉園に與へし手簡五通、並河誠明が頑果に與へしもの一通を收む、第五卷は、賴梅颺が中井悌（頑果の室）に與へし手簡三通を收めてある。

二四 梶菴先生歌文卷

中井斂菴先生の歌文草稿十一篇を收む。

一 卷

二五 井上赤水先生消息

赤水先生（通稱左兵衛）は、懷德堂創立當時並河誠所と共に助講として功勞ありし人であるが、其の行狀に至りては未だ詳かでない、従つて其の遺稿の如き隻字の存するものないが、幸に此の消息一通以て其の風姿を偲ぶことが出来る、年未詳二月二十五日並河五一に贈りし書狀で、誠所の歌を批正し併せて自作の歌三首を載せてある、至寶として左に之を掲げる。

枯野霜

こがれつる秋の草葉も面影に残てけふる野への朝霜

右忠藏亡兄（中井斂菴）一周忌に此人在世和歌の好人にて候故手向申度存し被申、久々にて歌袋をあけ、さかし出たるに候
これは兼題なり

同當座題

山家

うき世ぞといひて入にし山里のゆめによそ目のあらははつかし

此歌は愚意の如く聞へ候へば一ふしある體なるべし如何聞へ可申や賢慮承度候ようめか
人目かと思ひわづらひつれど當時此表和歌の知己無之筆にまかせ置候是亦如何高論仰ぎ
候

我えさらぬ方より寒菊といふ物を歌によめとありければ
雪の中にひとり立つゝきせ綿もおのつからなる翁草かな

二六 竹里先生歌文卷

一 卷

加藤景範の手稿に係る歌文稿で、斎菴先生を悼み奉りて、名字の詞、稻垣の君に奉る詞等十
篇を收む。

二七 進善之連歌

一 卷

中井斎菴、吉田盈枝二人の連歌各五十句を書いたもので、延享二年三月に始まり同六月にて
終る。

二八 逸史進牋

一 卷

寛政十一年幕府より逸史獻納の沙汰あり、此の時差出したる竹山先生自筆の進牋草稿である、
尙其の年十一月十三日奉行所に伺立てたる竹山先生の「奉伺候口上覺」二通を附してある。

二九 蕉園先生詩卷

一 卷

蕉園先生自筆の五七律絶句三十餘篇を收む。

三〇 蕉園先生文卷

一 卷

蕉園先生手稿の原誇、二源論、古刀記、寒濤樓記、書中庸定本後五篇を收む。

一 告祖考文

堅一尺四寸、文政八年乙酉六月七日碩果告貽範整菴文惠竹山之靈文、告皇祖整菴先生文、弘化二年四月朔桐園告竹山履軒兩夫子之靈文の三篇を收む。

二 懷德堂幅

三宅石菴先生書

堅四尺二寸八分、横三尺五寸五分、懷德堂の三字を大書したもので、今祠堂の楣上に掛けられて居る別項刻額の原本である、最初は之を額にして講堂にかけられたが、何日の頃よりか刻額を造つて玄關に掲げることになり、本書は掛幅に仕立てられたと云ふ。

三 春樓先生雙幅

堅六尺六寸二分、横二尺二寸五分、一は「李白乘舟將欲行」云々の七絶、一は「南湖秋水夜無烟」云々の七絶。

三四 列菴先生雙幅

五井蘭洲先生書

一 函

堅六尺二寸五分、横一尺五寸一分、草書にて六言絶句の詩二篇が書かれてある、函題は中井碩果先生の手書に係る。(懷德第十一號「懷德堂遺物寄進の記」參看)

三五 泉治筆墨菊整菴先生贊

畫は享保三年戊戌孟春望夜泉治の醉筆に係る、贊は延享元年甲子正月記す所である。堅四尺五寸五分、横一尺五分。

三六 榎菴先生詠竹詩幅

堅六尺五寸、横二尺一寸七分、年未詳であるが、晩年の筆蹟である、五絕一首と序が記されて居る。

三七 榎菴先生一行書

堅六尺三寸、横一尺四寸七分。「有時自發鐘聲響、斂菴書」。

三八 竹山先生易三幅

各堅六尺一寸七分、横二尺一寸三分、一は、「地中生木升、君子以順德、積小以高大、☰_{巽下} 一は、「解䷹上 六三負且乘、致寇至、貞吝」一は、「坎六四、樽酒簋貳用缶、納約自牖、終无咎」と書す。

三九 竹山先生咏福壽草詩幅

一幅

堅五尺八寸、横一尺九寸。是は毎歲懷德堂の新年掛軸となつて居た三幅の一であるといふ、詠福壽草五絶一篇を記してある。

誰分禹疇目、小草得佳名、歲歲冰霜底、開花應夏正、詠福壽草 竹山居士

一三〇 阿岐兒端午紙幟

竹山先生書

双幅

豎六尺五寸五分、横二尺三寸二分、一は、「未免俗」の三字を紋藍紙に大書す、一は、「庚申之夏、手製斯幟、爲孫兒阿岐午日之慶、兒長之日、因念乃祖儉質、慎勿騰葛燈麻拂之嘲、渫翁圓印」と四行に書かれて居る、因に是はもと表裏一幅のものであつたのを、後分つて二幅としたものといふ。

三 竹山先生宮錦袍詩幅

一幅

豎三尺六寸五分、横一尺三寸四分。

客歲己未遙奉 大命獻鄙撰逸史、仲冬叨蒙褒賞恩賜章服二領、蓋異數也、庚申元日服以志感。

七十今朝又添一、獻書深愧史名高、何圖太白拜恩寵、新旭映輝宮錦袍、竹山居士中井積善書

三 履軒先生解師伐袁圖贊

一幅

豎七尺四寸五分、横二尺一寸九分、畫は岩崎象外の作る所、贊は左傳に倣ふて、「經、四十七年春王六月丁戌大雨雪云々」「傳、四十七年六月大雨雪書不時也云々」と猿蟹合戦の終始を記してある。凡て三百二十五字、因に坊間履軒戯著として、「昔々春秋」の一書が板行されて居るが、是は偽書である。

三 履軒先生食毒詩幅

一幅

豎六尺六寸、横一尺三寸四分、「食毒當舐皿、殺人當見血、讀書無自得、元不如無術、幽人圓印

一三四 中井抑樓先生詩幅

一 幅

堅四尺八寸三分、横一尺三寸七分、「享和紀元仲秋、聞方廣寺火偶作」と題する七古長篇を
寛政十年七月朔に書いたものである。

一三五 中井木菟麻呂端午幟 並河寒泉先生書 附、幟の乳 絹 本 三 幅

堅五尺八寸六分、横一尺七寸七分、一は「菊水分派」の圖上に「橘」を畫く、筆者未詳、一
は「菊水分派揚吾文教之芳波」二行朱書、一は「蒲酒在甕釀自熊羆之甘夢」二行。

一三六 並河寒泉先生擬風一篇

一 幅

堅三尺三寸五分、横二尺二寸、「擬風一篇、茅渟津人亨甫、餞示其外孫中井木菟之界府區庠
爲教師也」とて五章章八句の詩を書いてある。

一三七 並河寒泉先生出懷德堂歌

一 幅

堅四尺一寸二分、横一尺三寸、明治二年、懷德堂退轉の時、寒泉先生が「堂構于今百冊年」
の詩と共に、門扇に貼付して出られた時の左の歌を書いてある。
百餘り四十路四とせのふみの宿けふを限りと見かへりていづ

華 翁

一三八 中井桐園先生乙丑元旦試毫幅

一 幅

堅六尺二寸、横一尺四寸、晨雞報曉建寅天云々の七律を記す。

一三九 桐園先生辛巳歲旦詩幅

一 幅

堅六尺、横一尺三寸四分、「辛巳歲旦試毫」と題する七絶一首を書す。

一四〇 並河蟹街先生咏虞美人草詩幅

一 幅

堅三尺四寸、横一尺八寸二分、「江抹流霞白綴雪云々」の七古一篇を書す。

一四一 豊前守紀正穀詩幅

絹本 一 幅

堅六尺六寸三分、横一尺七寸九分、「寛政己酉春三月望寄賀竹山先生六十初度」と題して、七絶二首を書す。

一四二 藪孤山詩幅

一 幅

堅六尺四寸五分、横一尺三寸二分、「奉寄中竹山賢兄」とて、「周公膺戎狄云々」の五古一篇を書す。

一四三 梁田蛻巖尺牘

一 幅

堅三尺五寸五分、横一尺四寸五分、斎菴先生に贈つた書柬で、新井白石が五月十九日（享保十年）中風にて死去した旨の通知狀である。

一四四 歸馬放牛圖

谷文晁筆

雙幅。（函入）

堅八尺九寸五分、横三尺五寸五分、是の圖は寛政中谷文晁が懷德堂に寓して居た時作つたも

のと云ふ事で、もと講堂の襖に張られて居たのを、後これを剥いで裱装したものといふ。(懷德第十一號懷德堂遺物寄進の記參看)

一四五 朱文公畫像

一幅

豎五尺九寸四分、横二尺一寸一分、彩色密畫、筆者未詳。

一四六 朱文公大字行書四訓墨本

四幅

各々豎六尺三寸五分、横一尺二寸一分、是は竹山先生が本書を徳川將軍家から借用して、篆工前川蘆舟に摹刻させたものだといふ、是は其の拓本で、刻板は今中井家に保存せられて居る。「讀聖賢書、立修齊志、存忠孝心、行仁義事、晦翁(朱熹之印)(晦菴)」とある。

一四七 朱子墨本

一幅

豎六尺三寸三分、横一尺五寸八分、「魚龍變化、朱熹(朱熹之印)(晦菴)」とある。

一四八 紫烟帖

石菴先生書拓本

一幅

豎一尺二寸、横八寸四分、二十紙、萬年先生が、草書にて唐詩絶句十九首を書いたものを木板に附して摺本にしたものである、帖末に明和元年甲申冬作る所の三宅春樓先生の跋がある、因に此の板木は現に中井黃裳先生の許に保存せられて居る。

一四九 道風書道澄寺鐘銘

懷德堂鑄

一幅

芳野の西北三里許なる榮山寺の鐘は、もと山城深草里道澄寺の物であつたが、故あつて此に移つた、而して其の銘（楷書）は小野道風の書と相傳へて居るので、延享年間三宅春樓先生が友生と謀つて之を拓本にし、板木に上せて帖としたものである。此の板木は今現に中井家に保存せられて居る、帖末に延享二年作る所の斎菴先生の跋及び五井蘭洲先生の跋がある。

一五〇 道風書秋萩帖 附、秋萩帖附箋蘭洲先生遺筆

懷德堂鑄

一 帖

大阪府南の清光院に小野道風草書一卷（古今集、菅家萬葉の歌を記す）がある、石菴先生毎に之を賞して居たので、春樓先生が寛延三年友人と共にこれを雙鈎に取りて梓に上せ、帖として廣く世に傳へたもので、帖末に寶曆二年秋作る所の春樓先生の跋がある。
尙別包として、蘭洲先生の附箋遺筆五葉が附いて居る。

一五一 蘭洲先生眞蹟

一 帖

右は五井蘭洲先生が、中井履軒先生の幼時に書與へたるものか、表紙に積徳藏と記されて居る、草書の習字帖で唐詩を書いたものである。

一五二 萬安渡石橋碑

一 帖

右は蔡忠惠公の萬安橋碑（楷書大字）が世に觀るもの鮮きを憾みとし、五井蘭洲先生が社中の諸友と相議し、資を出して板材を買ひ、中井竹山、履軒兄弟が躬ら刀を執り、また友生の佐をかり之を刻し、拓本としたものである。帖末に寶曆四年甲戌中元作る所の蘭洲先生自筆の跋がある。

一三 文肅先生碑

一帖

播州龍野藩儒藤江熊陽の碑文拓本を帖にしたものである。撰文は五井蘭洲先生、其の書は三宅春樓先生の筆に成る、帖尾に寶曆四年二月十六日作る所の竹山先生自筆の跋があつて、碑石を播州へ送るに際し拓本にした旨を記されてある。

一四 梵菴先生行書帖

梵菴先生肉筆大字行書の折手本で、重に唐詩が書かれてある。

一五 懷德堂記帖

石菴先生題字、竹山先生撰並書

一帖（桐函入）

堅二尺一寸五分、横一尺一分、石菴先生の題字は「懷德堂」の三字を大書す、堂記は寛政八年丙辰の秋作る所に係る。

一六 懷德堂帖

竹山先生書拓本

一帖

竹山先生が寛政八年九月作る所の懷德堂記を、享和元年秋日摹勒上石し、これを拓本にして帖にしたものである。

一七 懷德堂帖

一帖

堅一尺七分、横二尺五分、竹山先生が懷德堂に於て、混沌社諸賢賴春水、菅晋帥、田中鳴門等を招き夜宴を催した時の席上分韻の詩、其の他竹山交友の贈りし詩を貼したもので、曩に懷德堂記念會に於て印行せし「懷德堂先賢墨迹」は、多くこれに據つて居る。

一五 十路鬪詩 竹山先生批

一帖

享和二年壬戌仲秋、竹山門下が十路詩題を竹山先生に請ひ、各々之を作りて詩才を鬪はしたもので、二人を組合せて竹山先生が其の優劣を批評したものである。初に藤田如水の序あり、次に竹山先生の題言あり、以下驛亭路、松下路等十題の七絶を黃箋に記す、鬪詩者は並河亘川、三村嵐山、藤田如水等二十二人である。

一六 混沌諸彦錢叔寶樂志圖引

一帖

安永五年丙申十一月、竹山先生が書堂の小集に、藏する所の錢叔寶の樂志論書畫を出して混沌社中の葛子琴、田中鳴門、賴春水、篠崎三島の四人と共に、席上韻を分ちて賦した詩を収めた帖である。

一七 竹山先生遺筆背誦殘紙 並河寒泉先生題簽

一帖

懷德堂童幼の背誦用に編纂されたもので、兩儀、二親、三才、三徳とか、四象、四方、四時、四禮、四聲とか、五行、五星、五倫、五常とか八十餘項を標して各其の目を記してある。

一八 蒙養篇

一帖

竹山先生が童蒙の教訓とし、兼て習字本とすべく候文にて書かれたものである。

一九 竹山先生唐詩帖

一帖

竹山先生の行書帖で、唐詩選の五言絶句が書かれて居る。

一六三 蕉園先生反古帖（雕蟲篇附帖）

横帖一帖

右は中井蕉園先生が自作の一宵十賦に就て、賦中用ふる所の難解の熟語などを摘記し、簡単な解を施した雜記帖である。

一六四 懷德堂先哲反古帖

大 小 二 帖

小帖は並河寒泉先生の自ら貼する所、明治七年甲戌季秋作る所の「反古帖序」あり、其の由を記す。先儒の遺墨断片にして、詩稿類多く、集に漏れたるを補ふべきもの、其の他寶重すべき資料がある。

大帖も同じく寒泉先生の收輯糊繕したものであるが、其の半は中井黃裳先生の追輯に係ると云ふ、其の内容は小帖と同じ類のものである。

一六五 懷德堂刻額 石菴先生書

一面

大正五年現懷德堂重建の際、中井家より寄贈されたもので、今祠堂の楣上に掲げてあるのがそれである、豎一尺六寸六分、横三尺三寸二分。

一六六 懷德堂壁署 竹山先生記並書

三面

其の一は寅八月謝儀に就ての定二箇條を記してある、豎一尺二寸一分、横二尺七寸六分（硝子額）。其の二是安永六年正月のもので、やはり謝儀に就ての定一條を記してある、豎一尺二寸八分、横一尺二寸（硝子額）。第三は安永七年六月の定で、書生の心得八箇條を示して

ある、豎一尺三寸、横二尺七寸六分。

一七 懐德堂記額 附、題字 竹山先生撰並書

一枚

講堂南側東寄の楣上に掛けられたものゝマクリといふ、豎一尺八寸五分、幅六尺三寸五分、寛政八年丙辰秋の書に係る。（懷德第十一號「懷德堂遺物寄進の記」參看）

一八 懐德堂講堂楣上小障宋六君子圖

六面

周子、二程子は鄧關月の筆、張子、司馬子、邵子は中井藍江の筆になつたもので、孰れも賴春水の筆になる朱文公の贊辭が書かれてある。寛政九年閏七月竹山先生の爲に書したもので、もと透彫の枠に入れて楣上に掲げられたものと云ふ、今硝子額に收めて一函とす、各豎一尺、横三尺八寸八分。（同前）

一九 曲肱樹額

竹山先生書

一枚

己有園亭樹に掲げられた額のマクリで、「曲肱樹」と行書で書かれてあるが、曲字が破れてない、豎七寸八分、横二尺五寸五分。（同前）

一七〇 己有園額

石菴先生書

一紙

豎九寸、横一尺三寸、懷德堂己有園に掲げられた額「己有」の二字を双鉤に取りたるものである。（同前）

一七一 琴筑詩小額 蕉園先生書

一面

豎一尺一寸七分、横一尺三寸八分、「琴筑滿簷云々」の七絶一首を小箋に草書す、落款に「介菴」とあり。

一七二 懐德堂繪圖屏風

一面

右は舊懷德堂の構造に關する圖面十二版、並に之に關する記錄類を屏風一雙に貼したものである。豎六尺一寸、横一曲各二尺七寸五分。(懷德第十一號「懷德堂遺物寄進の記」參看)

一七三 菊章刀子 古錦欄袋入

一面

慶應戊辰の春大阪御親征の砌、山階宮晃親王が懷德堂に御成になつた、其の時賜はつたものである。鞘長さ七寸一分、刀身三寸、近江介宇多金重の銘がある。其の囊は白河樂翁公の龕帳になつて居た古金欄を得たので、之を用ひて造つたものであると云ふ。右「記錄類函」に收む。

一七四 木 司 令 懐德堂所用

一枚

檼木で造つた圭様の柝である、豎中央八寸五分、兩端七寸五分、横一尺二寸八分、厚さ一寸四分、表面に蕉園先生の筆に係る隸古「木司令」の三字を刻し、裏面に同先生の銘が刻んである。曰く、

一令而寤、再令而顧、三令而聚、執簡而馳、莫余敢違、絃于斯講于斯、以終余始。

一七 入徳門聯 竹山先生書

懷徳堂の玄關に掛けられた竹聯で、一は「力學以修己」、一は「立言以治人」と刻まれてある、豎二尺九寸一分、横徑三寸三分。

一六 螺鈿韻匣

懷徳堂講堂の床間に置かれてあつた螺鈿の十二硯匣の一で、蠟石に刻した履軒先生手筆の韻字を藏めてある、他の硯匣は皆散逸したさうである、匣豎八寸、横四寸、深さ八分。

一七 逸史 及 懷徳帖題籤木板

一 匣
一枚

板本の逸史及び懷徳帖に使用されたもので、兩面に刻してある。

▲水哉館遺書 一百二十七點

共 三十三冊

中井履軒先生手稿

〔一六—一七〕 七經逢原 三 冊

一七 周易逢原 一 冊

一九 夏書逢原 一 冊

一八 古詩逢原 八 冊

八一 古詩得所端

一 冊

八三 古詩古色

一 冊

八三 左傳逢原

六 冊

八四 論語逢原

四 冊

八五 孟子逢原
八六 中庸逢原

七 冊

八七 大學雜議

一 冊

〔附〕 逢原笈蓋表書一紙並包紙（「假山畚武怒通」履軒先生書、封題袖園先生書）、七經逢原題簽副二紙並中井敬所翁手簡、七經逢原目錄一通。

（右春慶塗「假山畚」函に藏む）

履軒先生の畢生の業は研經に在る、其の經解は七經逢原、及び七經雕題、七經雕題略に具はつて居る、古詩逢原の序によると、壯歲先づ逢原の著あり、既にして増加改定する所多く、塗抹重複して讀むべからざるに至つたから、細字にて本經の上頭に書寫し、名を雕題と命じたが、爾後三十年を経て、塗抹益甚だしく、他人能く讀む者がない、そこで雕題略を作りて別行したが、固より略なれば其の説備はらない、因て一通を寫して之を詳備せんとしたが、其の業繁浩に苦んだ爲に、雕題に纂めた宋明諸家は皆其の氏號を存したが、後ち長短を折中

會萃して一家の言をなし、復た其の氏號を示さず、是は簡便の術に趣いたもので、人の美を掩ふのではない、また唯集傳の遺則である、吾の肇めた所ではない、若し本說の氏號を求めると欲せば、雕題を參看すれば判然する、余行年七十、耄且つ及ばんとして居るから、是の後恐らく増加する所もあるまいと述べて居るが、其の精力の絶倫なる、只々驚歎するの外はない、是の書は左傳逢原を除くの外、何れも毎半葉九行の半紙板野紙を用ひ、本文は大抵十九字或は二十字、自説は一格を下げて二十三四字乃至二十七八字に寫されてある、而して撰者名を署せず、皆「水哉館學」と記されて居る。

周易逢原は朱子本義に據るとある、第一冊は周易上第一、第二冊は周易下第一、第三冊は翼傳第三とし、終に附言として擬序、卦變辨、方位辨、筮則、記式、八卦考、附考の諸篇を收めてある。

尙書逢原は蔡氏集傳に据るとある、而して題籤には夏書逢原とあり、履軒先生が見て以て夏史作る所とする堯典（舜典を合す）臯陶謨、禹貢、甘誓の四篇を收む。

古詩逢原は、卷首に逢原を作りし理由の序あり、而して此の編は文公集傳に据りて取舍す、故に其の異を錄して其の同を擧げずとある。此の八冊の外に、古詩得所徧、古詩古色各一冊あり、前者は其の説によれば、今の詩は韓魯毛詩皆古詩の舊本で孔子の刪本でない、故に自ら量らず詩を刪つて之を釐正し、風雅頌合せて二百七十一篇を得たとて、其の目と體裁とを示し、終に其の刪る所三十四篇の詩柿目錄及び周文公の親筆と思はる、十七篇の目錄とを擧げてある、後者は履軒先生の釐正した二百七十一篇の本文のみを寫し、併せて其の書式の體裁を示したものである。卷末に附錄として、夏書、論語、孟子三書の本文書式の様本を示し、次に蛇足として、註解諸書正本の様本として、杜氏の春秋、經傳集解、朱

氏の周易本義、朱氏の詩集傳、蔡氏の書集傳、朱氏の論語集註、孟子集註、中庸、大學章句の本文書方様式を掲げてある。

左傳逢原は杜氏集解に据り、本文の一两句を摘記し、自家の解説を雙行に記してある、卷首に春秋議一篇を收む、其の論によれば、戰國の時、孔子の春秋は尙存して居たが、秦始皇即位の前三歳、即ち楚が魯を滅した時に、孔子の春秋先づ滅びた、故に今の春秋は孔前の舊春秋で、孔子の春秋でないと云ふのである。

論語逢原は朱子集註に據る、本文を掲げ各章毎に自家の解説を記してある。

孟子逢原同じく朱子集註に據り、本文及び自家の解説を記してある。

中庸逢原は朱子章句により、本文及び自家の解説を示してある、卷末に天樂樓章句の中庸を掲げ、全篇を二十八章に分つてある。

大學雜議は七經逢原外で、中庸に附してある、天樂樓章句の大學を掲げて、全篇を十一章に分ち、別に一章毎に解説を施してある。

因に七經逢原を藏めたる函は、履軒先生當時のもので、蓋裏に「假山畚武葱通」と題された、蓋し是の書は假さぬ本といふ意であると、而して函のみ中井家に存して、書は久しく水野某の手に在つたが、明治二十一年九月二十日中井氏の手に歸したるものであると云ふ。尙當時は詩書の二部散佚して久しく所在不明であつたが、昭和八年一月懷德堂が偶々これを鹿田書肆より購得たるを、中井氏の懇望により更に同氏に寄贈し、茲に全書完璧となつた譯である。

〔七八一九四〕 七經雕題

履軒先生自筆首書

三 冊

共 三十六 冊

二八 周易雕題 据朱子本義本

一八九 尚書雕題 据蔡氏集傳本

六 冊

一九〇 詩 雕 題 据朱子集註本

七 冊

一九一 左氏雕題 据杜氏集解本

十五 冊

禮記雕題 關 (二十冊)

一九二 學庸雕題 據朱子集註本

一 冊

一九三 論語雕題 同

二 冊

一名「四書雕題」

一九四 孟子雕題 同

二 冊

右の書は何れも其の訓點を改正し、且つ書物の上頭或は行間に他説並に一家の説を細書したもので、卷首にそれゞゝ「何雕題、津國中井積德處叔父纂」と記されてある、而して七經中禮記雕題二十冊のみが闕けて居る。

周易雕題は延寶三年壽文堂刊行に係る山崎點本（毎半葉八行、行毎に十六字、註双行十五字）を用ひてある。

尚書雕題は和刻の蔡傳本（刊行年月不明、毎半葉六行、行毎に十六字、註双行十九字）を用ひ、尚卷首に孔安國序、卷末に書序を寫して、これに按語を加へ挿入してある。

詩雕題は和刻の集註本（刊行年月不明、毎半葉六行、行毎に十六字、註双行十九字）を用ひ、卷首に讀詩綱領、卷末に朱子の詩序辨説を各手寫して綴込んである。

左氏雕題は寶曆五年刊行本（那波魯堂句讀）を用ひてある。
學庸雕題は、三刻兩錢四書本（每半葉九行、行毎に十七字、註双行十七字）を用ひてある。

論語雕題、學庸雕題本と同じ。
孟子雕題、前書と同じ。

一五 周易雕題附言（題籤作附卷） 履軒先生手稿

每半葉十行、行毎に二十四字、凡て十六頁、八卦圖、六十四卦次序圖に對し、新に卦位新圖を作り、卦變辨、擬序、筮則、十翼說等の諸篇を收めてある。

一六 尚書雕題附言 履軒先生手稿

一 冊

每半葉九行、行毎に二十字、凡て十二頁、史記儒林傳、漢書儒林傳、漢書藝文志、劉歆傳、論衡等より尚書に關するものを摘記し、尚書今古文四家（伏生、孔安國、張霸、梅賾）中、獨り伏生のみ其の真を得、餘は並に偽撰に係る旨を論じてある。

一七 毛詩雕題附言（題籤作附卷） 履軒先生手稿

一 冊

每半葉十行、行毎に二十四字、凡て八葉、王魯齋及び程敏政等の説を列記して、按語を加へ、詩三百篇は是れ其の原數なるを言ふ。

〔一九八—二〇五〕 七經雕題略 履軒先生手稿

共 二十冊

一九 易（七經雕題略之二） 三 冊

一九 尚書 (同)

附 典謨接

二〇 詩 (同) 三

二一 左氏春秋 (同) 四

二二 禮記 (同) 五

二三 中庸 (同) 六

二四 論語 (同) 七

二五 孟子 (同) 八 二 冊

以上總て毎半葉九行、行毎に二十字、何れも本文の一、二句を擧げて自説を述べてある。而して易雕題略の卷首には、「七經雕題略辨言三則」を掲げ、此の書は書冊の上頭に細書したもので、元より撰述の等にあらず、得るあれば隨ふて書し、以て遺忘に備へたが、茲に三十年、書幅に涯あり、新舊厖雜讀むべからざるに至つたから、別に篆錄した旨を述べてある。

易は朱子本義に據る。

書は蔡氏集傳に據る。

附錄の典謨接一冊は、堯典と臯陶謨の二篇を取りて、本文を朱字に書き、其の上下に黒字を以て意を足し、解し易くしたものである。

詩は朱子集傳に據る。

左氏春秋は杜氏集解に據る、卷首に左氏雕題例言六條が掲げられてある。

禮記は陳氏集說に據る。

中庸は朱子章句に據る、終に水哉館定本の中庸本文を寫してある。

論語、孟子共に朱子集注に據る。

二〇七 七經雕題及七經雕題略目錄 中井黃裳先生記

一一通

識語によれば、雕題合せて五十六冊は履軒先生の遺本で、其の易書詩大學中庸論語孟子は家藏して失はなかつたが、左氏のみは久しく浪華の水野氏に在つた、それを明治二十一年に獲て珍藏する事が出來たが、たゞ禮記二十冊のみ闕けて居ると、また雕題略の方は共に十九冊中論語のみ家に在つて、其の六經十七冊は同じく水野氏に在つたのを、同じ年にこれを獲たと云ふ。

二〇七 史記評林雕題 履軒先生手稿

一十九冊

寛文十二年刊行の八尾本を用ひて、其の欄外に自家の説を細書し、また舊點を塗抹して新に點を加へたものであるが、全書中、首巻の目錄を除くの外、敍文、論例、列國分野、系圖、凡例、評林姓氏、書目、總評、短長説を一括し、また三皇紀、秦紀卷尾、景紀、武紀、漢興以來將相名臣年表、禮書、樂書、律書、陳涉世家補論、三王世家、傅蒯列傳、扁倉列傳卷尾、龜策傳を一括して、之を全書中から刪除し「史記削柿」と名づけて、上下二冊に綴ぢてある、而して其の他の二十七冊を以て司馬遷の筆と見たのである、史記は履軒先生の尤も力を用ひ

たもので、生涯に二十八遍通讀し、而して讀む毎に本文にも註にも筆削を加へたと云はれる。
 (右第八號「史記」函に藏む)

二〇八 後漢書雕題 履軒先生首書

六十冊

刊行年月不明、每半葉九行、行毎に十七字の和刻本を用ひて、他の雕題書と同じく訓點を改正し、欄外に自説を載せてある。是の書中井家より寄贈の際は第十五冊の一冊のみで、五十九冊は早く紛失して居たものであつたが、今春伊藤有不爲齋本入札の際、圖らずも此の五十九冊が現はれたので、此の分は本堂に於て之を購入し、完書とする事が出來たものである。

二〇九 三國志雕題 履軒先生首書

四十冊

寛文十年三月京都村上勘兵衛板行本に據り、一々訓點を改正し、欄外に自説を書入れてある、是の書も後漢書と同じく早く散佚したものであるが、今回伊藤家から寄贈されたので、茲に收むることが出來た。

二一〇 莊子雕題 履軒先生首書

十 冊

寛文五年風月庄右衛門開板の莊子鷄齋口義を用ひ、一々讀法を改正し、欄外に自家の説を書入れたものである。

二一 世說新語補雕題 履軒先生首書

十 冊

元祿七年京都林九兵衛梓行の李卓吾批點本を用ひ、欄外に自説を書入れたものである。

三三 小學雕題 履軒先生首書

二 冊

寛文四年京都田村五郎右衛門梓行の無點本を用ひ、其の欄外に自家の説を書入れたものである。

三三 古文眞寶前後集雕題 履軒先生首書

三 冊

前集は寶曆三年京都秋田屋の板行に係るもの、後集は安永四年京都上坂市兵衛の板行に係る箋解本を用ひて、其の欄外に自説を掲げてあるが、前集には特に朱筆の細書が多い、蓋し是は壯時の書入らしい、處々「仰齋先生曰」として早野仰齋の説を掲げてるのは珍らしい。尙句讀訓點を一々改正してある。

三四 天經或問雕題 履軒先生首書

三 冊

西川正休訓點本（享保十五年江戸松葉軒板行）を用ひて、欄外に自家の説を掲げたものである。

三五 度量衡考雕題 履軒先生首書

二 冊

度量衡考は物祖徳の著述である、（享保十九年板行）欄外に朱筆を以て其の説を駁したものである。

三六 古今和歌集雕題 履軒先生首書

二 冊

年未詳、訶和智屋新刊本を用ひ、處々朱筆を以て、一家の説が書入れられてある。

三七 伏生尙書 履軒先生自筆考定

一 冊

伏生傳ふる所の二十七篇、即ち夏書四篇、商書六篇、周書十七篇の本文を寫して訓點を施してある。

三八 梅隣古文尙書 履軒先生自筆旁注

一 冊

梅隣傳ふる所の大禹謨外二十五篇及び書序、舜典篇首の二十八字及び金縢は共に偽書であるとして、其の本文を寫し、且つ旁註を施してある。

三九 中庸天樂樓定本 履軒先生手稿

一 冊

全篇を二十七章に分ち、三宅石菴先生の説に従ひ、章句本第十六章「鬼神之爲德其盛矣乎」の章を第二十四章「故至誠如神」の後に移して、第十九章としてある、尙處々本文の字を朱改してある。

三〇 水哉館讀法禮記 履軒先生訓點

三 冊

安永八年松梅軒再刻に係る禮記正文本を用ひて訓點を施したもの。

三一 水哉館讀法書經

履軒先生訓點

一 冊

前書と同じ松梅軒の尙書正文本を用ひ、訓點を施したものである。

三三 通

語

履軒先生手稿

十 卷 三 冊

每半葉九行、行毎に二十字、第一保元語に始まり、第十南語に終る、源平二氏より南北朝に至る歴史を書いたもので、毎巻前後に「野史氏曰」として論贊がある。

三三 履軒弊帝

續編季編共

履軒先生手稿

三 冊

正編は每半葉九行、行毎に二十字、卷首に自序あり、幽人古文を好み時に著論する所あるが、其所謂古文は世人の所謂古文ではない、蓋し昌黎氏と宗を同じくする、故に其の自ら標榜すること甚だ高く、其の自ら雜著を輯するに及んで、自ら命じて弊帝と曰ふ、蓋し自ら其の用に中らざるを知るからだと記し、文二十五篇を收む。

續編は卷首に享和三年癸亥（時に年七十二）作る所の自序あり、正編を輯して後歲月三十餘歳を経た、眼益昏くして軀未だ死せず、篋中紛々として數十張の敗紙があるので、また之を輯した旨を記し、七十一篇を收めてある。

季編は卷首に文化四年丁卯夏（時に年七十六）作る所の序があり、論或は議に涉る長文十一篇を收めてある、續、季編共に每半葉九行、行毎に二十二三字、或は二十四五字。

三四 履軒髦言

履軒先生手稿

二 冊

每半葉九行、行毎に二十三四字、卷首に自序あり、内に曰ふ、「行年八十、幽人已髦矣、眼

昏善忘、加之以脚軟、一飯一食、如爵之逐粒、一臥一起、猶嬰之在抱、（中略）弊帝續季、皆已成卷、故繼之以髦言」と、上巻は興議、濮議、宗廟議等十五篇を收め、下巻は後聖空議の長篇を收む、但し下巻は原本佚した爲に、草本を以て補ふてある。

三五 水哉子 履軒先生手稿

二 冊

漢文の隨筆なり、和漢の事を記す。

三六 履軒古風 履軒先生手稿

四 卷 二 冊

卷首に自序あり、曰く「幽人喜誦古風詩賦、時而出之者此篇是也」と、賦及び各體の詩、並に銘贊辭皆此に附してある。

三七 洛汭笑囊 履軒先生手稿

一 冊

每半葉八行、行十六字、凡て十四葉、文化三年冬履軒先生年三十六の時、高辻中納言胤長の賓師となりて京に赴きし一年間の詩及び賦を收む、終に明和四年冬作る所の跋を附す。

三八 枕上雜題 履軒先生手稿

一 冊

每半葉九行、行毎に二十字、卷首に天明五年乙巳作る所の自序あり、曰ふ、「枕上夢回、殘燈耿々、往事聚憶、有不勝其感者、乃時念詩以驅之（中略）一夕偶用俗套、以千文爲頭號、成數首、乃繼之、自冬涉春、得五百首、意闌而止矣」とあり、凡て五言絕句で、五百首中十首だけ闕けて居る。

三九 諧韻瑚璉 履軒先生手稿

一 冊

卷首に明和六年己丑作る所の自序あり、次に例言七條を擧げてあるが、毛詩、易、離騷の押韻より歸納して、古韻を九部に分ち、かの悉曇の音學、四聲部限の拘を廢して、古韻に復せしめんと試みた研究書である。

三〇 履軒古韻 履軒先生手稿

一 冊

卷首に明和七年春作る所の自序あり、曰ふ、幽人近體の詩を作らずして古風を愛す、故に其の用韻毎に古韻に循ふ、是の錄や乃ち其の自ら用ふるもので、故に之を命じて履軒古韻と云ふと、即ち前記諧韻瑚璉の一書より推して、一家の韻書を編したもので、九部に分つて其の韻字を列記してある。

三一 深衣圖解 履軒先生手稿

一 冊

禮記の深衣篇及び玉藻の文に就て、其の制度を考證し且之を圖解したもので、卷末に明和二年冬作る所の跋あり、深衣の燕服なる事を論じ、異服異言の導をなすものにあらざる事を辯じてある。

三二 屬辭連珠、左傳年表

履軒先生手稿

合 本 一 冊

前者は左傳文中、四字句の雋秀なるものを摘錄したもの、即ち、六鶴退飛、兩鞠皆絶の類で、凡て五百聯四千言。

後者は左傳の隱公元年より哀公二十七年に至る年表である。

三三詰辨 履軒先生手稿

楊翼辨、姪娣辨、内外兄弟辨、百姓辨、寢廟辨、襦袴辨の六篇を收めてある。

一 冊

三四傳疑小史 履軒先生手稿

一 冊

每半葉九行、行二十二字、凡て二十葉、武篇、訓篇、老篇、難篇、穗篇、感篇、甲篇、燭篇、雜篇と題し、豐德時代武將の逸事を載せてある。

三五服忌圖 履軒先生手稿

一 冊

卷首に寶曆八年戊寅作る所の前引あり、禮喪服により、古禮を參照して、私に服忌圖を作つたものである、蓋し是の歲父整菴先生歿した爲に、服忌の必要に迫られて、研究されたものであらう。

三六 絶句逢原 履軒先生手稿

一 冊

是の書は履軒先生が、絶とは截なり、古人の篇中四句を截して、別に一篇となし、之を管絃に被らしむ、故に之を絶句と云ふ、或は絶とは殊なり、其の句奇絶にして、庸調に殊異なるものを謂ふといふ見解から、樂府及び文選中より、五言四句の詩を擧げて、其の例を示したものである。

三七 履軒外集 履軒先生手稿

一 冊

月可錄及び年成錄の二者を收む、前者は漢代に於ける政治上の事を記した隨筆である、紙數

僅に七葉。後者は、假名文に記された隨筆體のもので、朝服、恤俸、義嗣、系譜等二十種の目を掲げて、それゝ意見が述べてある。

二三 元間星（あらまほし）

履軒先生手稿

四卷合本 三 冊

二九 華胥國物語

履軒先生手稿

一 冊

世に斯くあらまほしき事をとて、得るに隨ふて書きつけたる假名文の隨筆である。
履軒先生其の居る所を名づけて華胥國と云ひ、其の室の入口には華胥國門といふ額を掲げ、
自ら華胥國王と號せられたが、其の理想の國の治まれる有様を假名文にて書き記した物語である。

二四 華胥國歌合

履軒先生手稿

一 冊

主客二人にてよみたる歌合せで、春八番、夏二番、秋八番、羈旅、述懷各二番、物名八番、
雜十四番、祝四番の歌を載せてある。

二一 華胥國新曆

履軒先生手稿

一 冊

華胥國に用ゆる歲次辛酉の曆で、日本では享和元年、支那では嘉慶六年に當る、一年を四季
に分つた珍な曆である。

二二 華胥國驥語

履軒先生手稿

一 冊

國文集なり、獨船、よこなまり、華胥國記等十七篇を收む。

二三 恤刑茅議 履軒先生手稿

徳川氏の法制に就て、假名交り文にて論じたるもの。

二四 辨妄 履軒先生手稿

一 冊

神代及び人皇の代を論じて、本居宣長の説を駁し、或は神道、神國の説などに就き、假名文にて書き記したる隨筆である。

二五 古今二微 履軒先生手稿

一 冊

六種微と六仙微との二篇にて、前者は古今序の六種につき、後者は六歌仙につき各假名文もて論じたるものである。

二六 老婆心 附、「しからみ」一卷 履軒先生手稿

五 卷 一 套

一卷づゝ奉書四枚をついで書かれた假名文のもので、第一巻は「長さまとひ」と題し、富家の嗣子少きを言ひ、第二巻は「夢のさめかた」と題して砂糖の害を述べ、第三巻は「くすしめく」と題して、これ亦淤血の事より砂糖の害に及び、第四巻は「のこる疑ひ」と題してこれ亦痘瘡の事より砂糖の害を言ひ、第五巻は「蛇のあし」と題して、諸病を論じて新穀、新酒の害及び砂糖の害を述べてある。尙別に「しからみ」と題する一巻が附してある、其の内容は和歌の倡和よりして夫婦となりし人の物語で、履軒先生の所作であるが、抄者は中井柚園先生らしい、是の書もと水哉館の遺書であつたが、何日の頃か紛失して、伊藤有不爲齋の藏

本となつたのを、此の度同家から寄贈を受けたので、此に收めることにした。

二四七 老婆心 履軒先生手稿

是は前記五巻の草本である。

二四八 遺草合巻 履軒先生手稿

曾孫黃裳先生の綴輯に係る履軒先生の假名文の遺草で、壺議、夢の記、集撰の沙汰、目くらうち其の他雜稿數篇を收めてある。

二四九 昔の旅 履軒先生手稿

昔文章博士が、弟の岡の翁といふ内記と文章生二人とを伴ひて、浪華より播州巡りをしたる詩歌入の假名文の紀行文である。

二五〇 經界圖 履軒先生手稿

司馬法の六尺爲歩と云ふに本づき、田里の事を論じたる假名文の書である。

二五一 刀甲辨 履軒先生手稿

一 冊

刀辨、甲辨の二篇にして、前者は刀類に大刀、中刀、小刀の三等ある事、後者は脇楯あるもの、脇楯なき胴丸のもの、腹巻鎧の三等ある事を、何れも假名文にて論じたものである。

二三 越吟 履軒先生手稿

三 冊

履軒先生作る所の和歌集である、黃裳先生云、第二冊表紙「中」とあるも、内容は中巻なく、其の冊には初に「穂篇」數葉あり、「次に越吟第三」と記せり、「穂篇」は「傳疑小史」と同系のものなりと。

二三 風懷百首 履軒先生手稿

一 冊

風懷百首、並に附錄として、晩年に至るまで詠み出づるに從ふて書付けたる歌百數十篇を收む、卷首に乙巳の年卯月作る所の自序がある。

二四 古都多飛 履軒先生手稿

一 冊

詩經の周南召南各篇を和歌に翻譯したものである、卷首に年不詳の自序があるが、恐らく晩年の作であらう。

二五 述龍篇 履軒先生手稿

一 冊

諸葛孔明の兵法を圖解講明した假名文の書である。卷首に安永二年孟秋作る所の自序がある。

二六 越俎弄筆 履軒先生手稿

一 冊

麻田剛立より人體減脉の説を聞き、また目観した所を圖し、これを假名文にて解説したものである。卷首に安永二年季春作る所の自序がある。

二五七 履軒數聞 履軒先生手稿

一 冊

和漢の度量衡に就き考證したものである。

二五八 三國志雕題草本 履軒先生手稿

一 冊

魏書を読みて、字句の疑はしきものを質したものである。

二五九 非物繼聲篇 草本 履軒先生手稿

一 冊

履軒先生が遺命を奉じて蘭洲先生の非物篇を校定した際、徂徠の論語徵及び二辨を読み、其の説の非なるを見て、別に論語徵を反駁したものである、卷首に年不詳の自序があるが、恐らく非物六卷を校了した明和三年の作（時に年三十五）であらう。

二六〇 鷄肋疑文 履軒先生手稿

一 冊

蘭洲先生の詩文集鷄肋篇を校定の際、字句の疑はしきものあるより、其の句を摘出して自己の意見を附し、竹山先生に質したものである。下巻の分には一部竹山先生の朱筆がある。

二六一 質疑疑文 履軒先生手稿

一 冊

二六二 瑣語疑文 同

一 冊

質疑瑣語共に蘭洲先生の著述である。是は明和四年印行されたが、鷄肋篇と同様これを校定して、其の疑を竹山先生に質したものである。二書共に竹山先生の朱筆がある。

二三 六書要語 履軒先生手稿

一 冊

孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜より要語を鈔寫したもの。

二四 簡諒篇 履軒先生手稿

一 冊

戴記、荀子、說苑、老子、莊子、淮南子、韓非子、文選、中論諸書より警語を鈔錄したものである。

二五 足利氏草本 履軒先生手稿

一 冊

足利史十四代を編年體に記したものである。

二六 雜說彙編 履軒先生鈔寫

一 冊

吉齋謾錄、續記、五經辨訛、文衡、周易舉正、焦氏筆乘、困知記、詩考等の諸書を雜鈔したものである。

二七 履軒臥友 履軒先生鈔並批

一 冊

梁田蛻巖、三宅萬年、三宅觀瀾、荻生徂徠、服部南郭、新井白石、祇園南海、五井蘭洲、秋山玉山、鳥山芝軒、釋萬菴等の詩集から、會意のものを各體に分ちて鈔寫し、且つ批點を施したものである。

二八 唐詩選國字解 履軒先生手稿

一 冊

唐詩選中の五七言絶句を探りて、俗語に解釋したものであるが、未完本である。

二七九 常 言 履軒先生手鈔

一 冊

常言と詩の雋句とを獲るに隨ふて鈔したものである。

二七〇 士喪禮 履軒先生手鈔

一 冊

題簽に士喪禮とあれど、最初に士喪禮云獻素云々の語を載せたるより名づけたもので、五雜俎の類を鈔錄したものである。

二七一 無題抄本 履軒先生手鈔

一 冊

延喜式、姓氏錄、夜會記、和名抄、其の他諸書を鈔錄したものである。

二七二 雜抄 履軒先生手鈔

一 冊

課語、逸詩考、池北偶談、其の他諸書を雜鈔したものである。

二七三 柳文 履軒先生手鈔

一 冊

柳々州の文集中より愛誦の文二十篇を鈔寫したもの。

二七四 五代論 履軒先生手鈔

一 冊

歐陽修の五代史より其の論贊のみを鈔錄したものである。

二七一 新採百首 履軒先生手鈔

賀茂真淵の選に係る同書を鈔したもの。

二七六 經解目錄 履軒先生手鈔

通志堂經解の目錄を鈔したもの。

二七七 本草目錄 履軒先生手鈔

本草の目と別名とを鈔し、和名を附したものである。

二七八 日本史目錄 履軒先生手鈔

大日本史の目と引用書目とを鈔したもの。

二九〇 寶曆測量圖 履軒先生手寫

是の書は寶曆四年春、泰慶體が、土御門三位治部卿安倍朝臣泰邦卿の庭上に備へてあつた測量具を圖解したもので、それを借りて謄寫されたものである。

一 冊

一 冊

一 冊

一 冊

二八一 西 卷 同
一 冊

共に月謝包紙の裏を用ひて草稿用にしたもので、書風を見ると頗る晩年のものらしい。

二二二 天經或問卷 履軒先生草稿

一 冊

反古の裏を用ひて草稿用に供したもの、天經或問の古表紙を使つてあるので、舊目錄に斯く名付けられたが、書名に關係はない。

二二三 度量考提要 履軒先生手鈔

一 冊

物徂徠の度量考から其の要を鈔錄したものである。

二二四 南類編史 履軒先生手鈔

一 冊

徂徠の著可成談を鈔錄したものである。

二二五 制度通 履軒先生手鈔

一 冊

伊藤東涯の制度通を寫したもの。

二二六 履軒小乘 履軒先生手記

一 冊

雜記帖であるが、卷頭に、北游行李と題して、明和三年仲冬、高辻菅公の聘に應じて上京せし時携帶した品目を擧げてあるのは面白い。

二二七 幽人先生手記 履軒先生手鈔

小 二 冊

篆刻の事や詩句を錄してある。

二八 日 錄 履軒先生手記

小一冊

題籤に「日錄」としてあるが、是は何人か書いたもので、内容は大部分藥の處方を記した手控帖である。また後の方には芳野、有馬、龍野へ行つた時の見物地の里程や入費を記してある、是の書も今回伊藤家から寄附されたものゝ一であるが、もと水哉館遺書中のものなる事明かであるから、此處に收むる事にした。

二九 河圖累棊 履軒先生手稿

禹貢九州圖、禹貢五服圖、周詩列國圖、春秋列國圖、戰國七雄圖、漢楚際圖、漢郡國圖、三國割據圖、兩晉南北圖、唐十道藩鎮圖、五代圖、宋明清圖の十四圖で、永日堂(春樓先生の齋名)刻板の大明一統圖を用ひ、其の上に書入れたものである。

二〇 治水濶論 履軒先生手稿

一冊

堯時汎濶圖、禹鑿龍門圖及び塞積石圖を描き、黑易論、龍門論、復古論の三篇を收めてある。

二一 孝經大義 履軒先生首書、袖園先生題簽

一冊

正保四年刊行本を用ひ、一々訓點を改め誤字を訂してあるが、首書は僅に八九箇所あるのみ。

二二 春秋左氏傳雕題 履軒先生雕題、袖園先生手寫

十五冊

安永六年京都越後屋の新刻に係る那波魯堂校定本を用ひ、履軒先生の雕題を欄外に細書したものである。

二五三 柚園先生色別首書小學 柚園先生首書

享保十九年大阪文熙堂板行の小學句讀本を用ひ、柚園先生が欄外に細書したもので、黒字を以て履軒先生の雕題、藍筆を以て竹山先生の小學斷を書入れし、問々朱筆を以てしたるは柚園先生の私記と云ふ。

二五四 河圖累棊 履軒先生撰、柚園先生手寫

一 冊

二五五 治水濶論 同

同

一 冊

右は履軒先生の原本を其の儘寫したものである。

二五六 離伏見聞誌 柚園先生手鈔

小一冊

格物要論、留青新集、讀書作文譜摘要等の諸書を抜萃した小冊子である。

二五七 柚園數記 柚園先生手稿

小一冊

柚園先生の文集で、常山紀談などを漢譯した記事の文最も多く、他は贊銘、題跋の類である。

二五八 柚園先生雜記 柚園先生手鈔

二 冊

和歌、假名、書式、本草、衣服等に關し、諸書より摘錄したものである。

二九九 小説類集 柚園先生手鈔

一 冊

考槃餘事、叢桂偶記、小學大全等の書を摘錄したもの。

三〇〇 閑距餘筆 柚園先生手寫

一 冊

是の書は竹山先生の著に係るもので、之を寫したものであるが、末尾に「文化七年三月下旬伊藤求己松園山人寫」とありて、舊目錄の抄者と合はず、姑らく疑を存す。

三〇一 紫蘭叢 柚園先生手鈔

一 冊

古人の詩文を鈔錄したものであるが、懷德堂關係のものが最も多い。

三〇二 華胥人傳 履軒先生題簽

一 冊

是の書は明の陶夕川の著はす所、履軒先生自ら華胥國王と稱するより藍水（門人カ）が是の書を花影集より鈔寫して天明三年秋履軒先生に贈つたものである、卷末に藍水の識語がある。

三〇三 隸續 履軒先生題簽

一 冊

前書と同じく藍水の寫したものらしい、隸續卷第五碑圖の部だけである。

三〇四 天樂樓書籍遺藏目錄

一 綱

天保五年十月履軒先生門人竹島竇山（名は衡）が水哉館の藏書を調べて作つた横綴の目錄で、

三百餘部を擧げてある。

▲水哉館遺品十五點

三〇五 萬年先生緩歩帖

一帖

右は中井履軒先生が父斉菴の收藏に係る萬年先生の眞蹟と諸家に散在するものとを探輯して、これを雙鈎填墨し裱裝したもので、帖尾に寶曆三年癸酉正月十八日記す所の斉菴先生の跋及び五井蘭洲先生の識語がある、萬年先生の遺稿は、一度は火災に遇ひ、一度は盜難にかかり、散佚して傳はらないが、幸に此の帖あり、詩七篇、短文二、和歌一首を獲ることが出来る。帖名は最初の六言詩に「緩歩成語中趣」とあるより名く。

三〇六 萬年先生襄陽帖

一帖

緩歩帖と同じく寶曆三年履軒先生が萬年先生の親筆を雙鈎填墨したもの、帖名は最初の詩に「襄陽海岳君」とあるより名く、これによりてまた萬年先生の遺稿詩九、文一、歌四、俳句五篇を獲ることが出来る。

三〇七 李斯繹山碑

一帖

同じく履軒先生の雙鈎填墨に係るが、題簽は五井蘭洲先生の筆になるものゝ如くである。

三〇八 履軒先生對月帖

一帖

履軒先生と師友の關係であつた池田の荒木梅闇が、履軒先生自筆草書の獨對鳳城月云々の五言古詩を梓に上したものである。帖末に梅闇が文化元年冬作る所の跋語がある。

三〇九 白鹿洞揭示額拓本

履軒先生書

此の刻板は今懷德堂の大講堂に掲げられてあるが、之を拓本にしたものである、首二三行剥落して居る。豎一尺四寸、横六尺六寸、天明二年壬寅仲冬の書に係る。

三一〇 文清先生遺像

一幅

豎六尺三寸二分、横一尺六寸六分、中井黃裳先生云、並河寒泉翁の談に、履軒先生畫像に三あり、何れも素書なるが、此の像最も能く肖ると、像の上に壙誌銘の拓本を貼してある。

三一 一 遊巡竹碑

五井蘭洲先生戲畫、履軒先生双鉤填墨

一幅

豎四尺五寸五分、横一尺六分。

三二 一 百首贊々殘紙卷

履軒先生手稿

一卷

百首贊々の草本殘紙を集めたものである。

三三 一 履軒先生行狀

一卷

履軒門人早野小石の手稿に係ると云ふ。

三四 天圖方圖 二面 附、天圖二、潮圖一 履軒先生手製

天圖は直徑一尺三寸七分の圓額に仕立て、星天即ち動天即ち天殻を示したもの。方圖は一尺四寸角の方額にして、地球を中心として月胞、日胞、星胞を示し、其の外天は、「華胥國王曰、是より外は我いまだ行きたることなき故しらず」と記してある。

附屬の天圖二、一は直徑八寸五分の木製にして、太陽を中心として、月胞、火胞、木胞、土胞、二十八宿を圓輪に切り連ね動く様に作つてある、一は一尺六分角の厚紙に、前者と同様な圓圖を各々作つて之を重ね動くやうにしてある。潮圖は堅一尺六分、横一尺四寸六分の厚紙に、地球を中心とせる月胞の圓圖を廻轉するやうに作り、其の周圍を日胞として、潮の満干を示したものである。

三五 紙製深衣 履軒先生手製

一 着 (筥入)

反古を貼りて深衣の雛型を作つたもので、「明和二年季秋履軒幽人製」(時年三十四)と記してある。長四尺六寸、身、裳、袖、衽、衿、純等それべく寸法を記入してある、其の著深衣圖解と併せ看るべきものである。

三六 後水尾天皇御物模造ヲコト點笏 履軒先生細書

一 握

長さ九寸五分餘、幅上部一寸七分、下部一寸三分、表面に點七種を圖し「經一尙書、毛詩、周易、春秋、周禮、禮記、論語、孝經、孟子、老子、莊子、楊子、荀子、文中子等用之」と記し、裏面も同じ點七種を圖し、「紀傳、史記、文選、前漢、後漢等用之」と記してある。

三二七 履軒先生遺硯

一面

右遺硯は脇坂正右衛門氏の舊藏であつたが、明治壬辰一月中井氏に贈りしものと云ふ、堅五寸五分、横三寸四分、厚一寸二分、色青黒。

三二八 螺鈿算盤

履軒先生所用

一 框

堅四寸二分、横一尺八分。

三二九 聖賢扇

履軒先生撰、柚園先生書

一本

長さ九寸五分、扇面の表に聖賢の名を朱書し、裏面に之を酒に譬へて、下記の如く面白く評を加へたものである、原書は失はれて存しないが、是は其の子柚園先生の筆に係るもので、「右先考文清君戲歴評聖賢也、文政庚辰(三年)九月十三夜月下書、中井環」と記されて居る。

釀評

孔孟

伊丹極上御膳酒 稱贊に詞なし。

漢以來之俗學

諸國の酒 上酒もあり粗酒もあり、處により時によりて様々差別あり、但よきといふには限あり、あしきは限なし。

老 莊

薩摩アハモリ たま／＼に一盞の賞玩、但酒宴に出されぬ。

釋

チンタ 夷狄人はうまがるげな。

道 家

藥保命酒 名目は結構なれど取あくる人なし。

神 道

獨醪 ドロウ 古代はこれにて事すみたるか。

禪

燒酎 サツトウ 暑中或は積氣おさへに一杯はよき事もあるべし、畢竟は毒と心得たるがよからん。

程 朱

伊丹並諸白 どちらからみても江戸づみ／＼、但並酒の古道具を用ひて造られたる故、すこしのうつり臭あり、又實が漓うて足がよはい、こゝが御膳酒におよはぬ所。

明 諸 儒

火入酒 損したる酒をなをすが手段。但醉さ味はなをりたるやうなれど灰の氣が鼻をつく、さらは酒はなをりたるやあらすや。

陽 明

臘伊丹酒

急度伊丹極上御膳酒と印はあれど、實は並酒に焼酎を合せたるものと見へたり。やはりビイドロの猪口にてまいるべし、問してはいけまい。

仁 齋

新酒 下戸がすく。

徂徠春臺

鬼ころし あらき計にて酒ともおもほらず。

右之外練酒、あま酒、九年酒、本直し酢、合酒品々御望次第。

以 上

懷德堂記錄

十 六 點

同 遺書 九十二點

六十九點

同 遺物 一百二十七點

水哉館遺書 十五點

同 遺物

共 計

三百十九點

懷德堂水哉館遺書遺物目錄

終